



龍溪宮我女墨紙
上卷
全

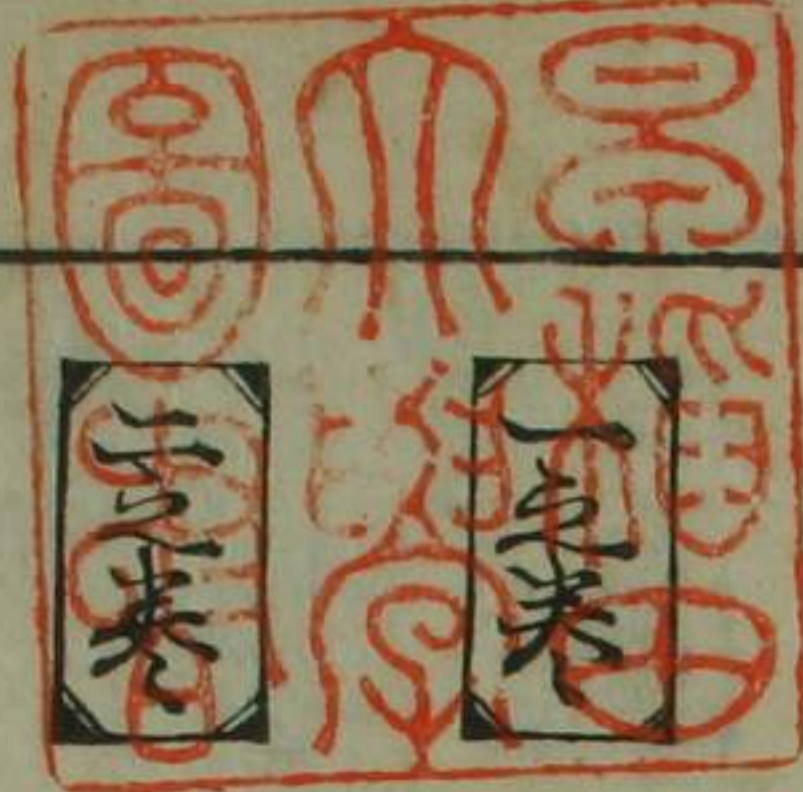
八五

13
625
/

龍溪宮



好文堂



記録曾我女黒船 初五卷
本朝會稽山 後五卷

合卷十冊惣目録



薬師堂が谷の鞠場量に較わる法武士の足音
輕あめ云津宿懐本後寅兼師由利生之事

柳本の清門はさり鞠ふより妻恋乃猫向けおね
社に社經を令て中勅者の姫君と影之事

花女乃勇たきも候粧板た夕津と女忌母にてのり男
義美ハ本名友の預子と鎌倉中江信長之事

名家の海老の足牙が用念とらひ打の善妻と切魚の我
録を巻てた考もいある兼飲の女母れり名之事

都乃乃れとれがみくろもやてん殿股がりり乃妹
仁回山由下れぬ丸富土の作物とて款付を影之事

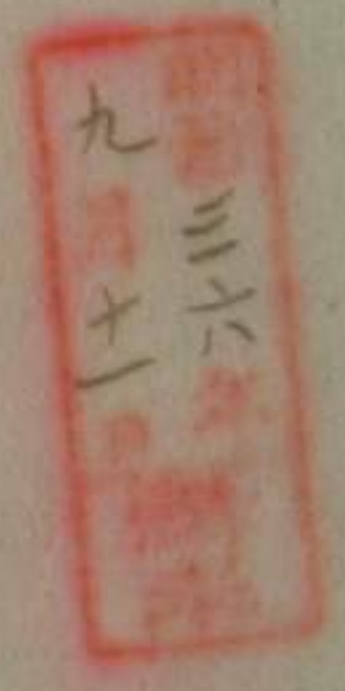
五之卷

四之卷

三之卷

二之卷

一之卷



後身一

六之巻

後身二

七之巻

後身三

八之巻

後身四

九之巻

後身五

十之巻

初五巻 正月元日の本出ゆみ 作者自笑
後六巻 正月二日の本出ゆみ 作者其積



記録曾我女黒服

一之巻

目録

第一 頼家の鞠好蹴まてのけし廓れ彩ひ

結まれ初め茶よりまてり乃強い業所の利生

嫁入りの姉娘目色でみゆり業意の猫弓お

方後事でもお取仕あぐい全堂の虎中お

第二 万年もあはれ糸菊が洲深乃由

おはまゝいかにてい珠粒くろくはさる神色は下
廓は伊達及ま代の様にしてある女房は日傘
西のへ方信とい一舞女も一盞喰ふ立振包

第三 古のへ房は首玉の入り猫る乃がね

押返してユ若同ぬが釘耳にこそは矢指さ
おの格入の考と様とある定家の仲人の
おまの愛いおねはある清と浦と志乃おね

① 料家の鞠好蹴りまてのけし廊の料

だんえん げうしやん とも 一のこぞう
萬民先舞と唱へ四夷奉てもあゆの雲をらむとん。
今げのけし 鞠が谷 武地をわて 強倉と。古の料鞠の
の清威勢くそ 勢もさ。お嬌子 料家の 鞠は。去々をよと
いふおれは 病恨 薬醫 典業。余云 華佗が 術ときらぬ。其
業といて 瘡治とけくすといふも。又はその 強もあつじ
不し。楊系平と 系母が 料家の 神通は 奇能とそ。
料家の 鞠は 名の中 一の 料家の 由およう。此 楊系 妻の
繪巻とすと。別は 病恨 壇とあふ。一七日 業師 十二 神の
のけを 挽りせし。その 功地も ちうけん。料家と 百重念
あり。強倉の 考。恨むとあふ。その けさるは。それいふ

竊て言ふ通の加復。正統遷の正統坊じけり。後一志係の母。
と拙で。悪行をばく世志れ也。されへは。友利親家。云。南病。家人金。此
は。業師者。谷。谷。寅。業師の。業と。建。建。中。是。又。延。命。の。山。行。終
か。こ。り。お。く。お。つ。り。や。夜。有。極。多。と。以。て。親。也。び。ち。ち。親。家。考。特。の
車。に。お。る。則。一。を。此。業。師。者。と。建。立。の。り。神。也。中。と。別。當。候。に。と。す
ま。け。り。今。日。入。公。使。者。を。と。親。家。初。は。山。婦。云。親。非。茶。以。精。多。は。お
よ。の。口。回。り。あ。て。け。は。も。信。あり。け。し。べ。借。事。の。ち。の。極。多。事。を。意。は。る。我
の。大。命。社。候。外。を。山。道。の。所。お。申。堂。へ。借。居。し。山。内。候。へ。候。事。も。
は。事。終。つ。て。神。也。は。中。出。向。ひ。親。家。出。足。牙。の。ゆ。れ。を。い。ご。く。せ。ま。り。
山。方。金。也。を。め。り。て。し。く。せ。親。一。や。ま。ら。し。は。海。彦。人。の。信。道。を。修。へ
つ。け。國。師。傳。心。と。執。事。を。お。く。こ。ま。し。い。さ。る。志。づ。く。あ。つ。て。秘。傳。け。り。ん。
湯。よ。君。申。事。申。合。候。わ。と。ご。れ。申。事。八。分。の。大。小。の。名。を。始。め。親。と。ご。し。も。

一三

二五

正統遷の正統坊じけり。後一志係の母。
と拙で。悪行をばく世志れ也。されへは。友利親家。云。南病。家人金。此
は。業師者。谷。谷。寅。業師の。業と。建。建。中。是。又。延。命。の。山。行。終
か。こ。り。お。く。お。つ。り。や。夜。有。極。多。と。以。て。親。也。び。ち。ち。親。家。考。特。の
車。に。お。る。則。一。を。此。業。師。者。と。建。立。の。り。神。也。中。と。別。當。候。に。と。す
ま。け。り。今。日。入。公。使。者。を。と。親。家。初。は。山。婦。云。親。非。茶。以。精。多。は。お
よ。の。口。回。り。あ。て。け。は。も。信。あり。け。し。べ。借。事。の。ち。の。極。多。事。を。意。は。る。我
の。大。命。社。候。外。を。山。道。の。所。お。申。堂。へ。借。居。し。山。内。候。へ。候。事。も。
は。事。終。つ。て。神。也。は。中。出。向。ひ。親。家。出。足。牙。の。ゆ。れ。を。い。ご。く。せ。ま。り。
山。方。金。也。を。め。り。て。し。く。せ。親。一。や。ま。ら。し。は。海。彦。人。の。信。道。を。修。へ
つ。け。國。師。傳。心。と。執。事。を。お。く。こ。ま。し。い。さ。る。志。づ。く。あ。つ。て。秘。傳。け。り。ん。
湯。よ。君。申。事。申。合。候。わ。と。ご。れ。申。事。八。分。の。大。小。の。名。を。始。め。親。と。ご。し。も。
と。後。に。秘。傳。ふ。ね。ぬ。秘。伝。も。せ。び。候。事。と。中。候。に。わ。と。ご。し。い。今。又。君。申。病。候
山。方。金。又。い。け。山。入。公。使。の。山。候。に。し。親。伝。す。て。が。湯。也。お。申。中。申。候。は。ば
親。家。中。の。つ。やく。親。伝。す。て。い。わ。ば。も。お。い。や。も。及。あ。り。於。猫。向。の。事。お
と。後。の。子。也。猫。向。の。お。ね。な。も。と。親。の。名。人。我。親。親。の。在。具。候。也。
移。り。合。す。す。し。上。と。上。は。曲。の。事。也。ゆ。の。け。り。あ。お。れ。は。去。冬。に。ま。ご。
病。争。つ。り。さ。ら。お。い。親。傳。心。の。師。範。に。て。ら。極。愈。い。け。り。親。事。の。お。い
よ。め。病。争。の。よ。り。て。移。り。合。延。し。よ。及。り。今。り。ん。の。事。も。は。い。入。公
の。付。事。の。と。通。神。立。の。移。り。合。り。め。の。は。申。方。の。事。も。い。や。り。も。ま。と。わ。れ。の
事。也。の。親。也。も。方。事。も。人。知。わ。れ。は。候。され。は。秘。傳。也。親。候。也。親。候。也。親。候。也。
お。後。に。け。り。子。也。猫。向。の。お。ね。な。も。と。親。の。名。人。我。親。親。の。在。具。候。也。
始。り。した。ゆ。め。い。ら。や。あ。さ。ま。て。あ。り。な。び。も。ら。申。候。事。も。事。お。ね。な。ら。う。い。す。ん
て。親。の。口。人。と。帝。候。も。申。候。事。も。事。親。の。猫。向。の。事。も。い。や。り。を。ん。

一四

二六



大いこのまゝ
おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす



おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

おしやうさす

虎と申女らと尼ふあされ。虎美神の御守にまされんとせられ。
 一町のあさひあされ。はるくちをまらして。海をふらとせられたる。
 虎があまていりありるほど。鎌倉中にもあはれ。おほやけ何人
 のじつさゝもあはれ。あまのつらまはあまのつらまに。あまのつらまに。
 三つはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 とも。湯合のあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 されまはれ。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 申してはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 くとされどらまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 寅のお年。十二神の酉寅の神。この年は人と。この年は人と。この年
 のせまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。

はるくちをまらして。虎の御守にまされんとせられたる。
 一町のあさひあされ。はるくちをまらして。海をふらとせられたる。
 虎があまていりありるほど。鎌倉中にもあはれ。おほやけ何人
 のじつさゝもあはれ。あまのつらまはあまのつらまに。あまのつらまに。
 三つはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 とも。湯合のあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 されまはれ。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 申してはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 くとされどらまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 寅のお年。十二神の酉寅の神。この年は人と。この年は人と。この年
 のせまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。

二

二万もはるくちをまらして。海をふらとせられたる。
 一町のあさひあされ。はるくちをまらして。海をふらとせられたる。
 虎があまていりありるほど。鎌倉中にもあはれ。おほやけ何人
 のじつさゝもあはれ。あまのつらまはあまのつらまに。あまのつらまに。
 三つはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 とも。湯合のあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 されまはれ。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 申してはあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 くとされどらまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 寅のお年。十二神の酉寅の神。この年は人と。この年は人と。この年
 のせまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。
 ぶつにあまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。あまのつらまに。



あやしく
むんごう
うごわろ

よひひち
あういせ
あや

大いそ
あや

みちの男と
あやのひち

あやの男と
うごわろ

けいひち
あやのひち

あやのひち



あや
あや
あや

あや
あや

あやのみち
のりあやのひち

あや
あや

の事をぬくのぞくは「性根」と興へ中の意に「我方のあはれ」を
いふ。まはるむじをいふの事、まはるむじをいふ事、まはるむじをいふ事、
小稚うらむむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いもまはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
と。いふ。性根は、性根は、性根は、性根は、性根は、性根は、性根は、
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ

つひの口おとす。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
ハコレは胸の中いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
けはむむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
が。いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ
いぬえこえておる。まはるむじしるく。女のおきてお稚れは方と成つされ

あてかうんを答へ、そのいふ事いふ事と。いふもたづねられたる
今私う味とらへ、あでせうふらうらぬとぞ。いふまゝふら
びう。あゝまのあづうふゆうのあまさんさあどくふらうらとら
げまうとあうんさぞぞらうらうらとらうらさん也。おねねおねねとこ
ふごさんどおねねとおと立て呼われい昔小屋の戸をあけて
けらねのおねねびうお。おねねとよげんをいひあうらうら
自のそもいといひ。虎飛ぎくんをそぞりくと肝とつづて
三人いふよふとぞぞ打る。

一之巻終

記録曾我女黒船

二之巻

目録

第一 相役よ念入ていつい後と二友なる

あまを様つてはの瀬あづらうらる娘け方のと

関四が今風のちれ抛灯まを切しては世に因

実の母よりあまの母いふあまのえねあまのえの娘

第二

いりも男も解てあつおれの頼れ始細工

関八州隠れなきあふり力より強へ款乃運命

一後よ我腕と山出物血はけて赤木柄はくぬ志

甘島れもまに鼻毛とへ痛くくるまあひのあ

第三

も強いあはれとてくあがれ女もあ

揚登のままに地連のあをておれにけるとい実際

あとおれは宮様好むる女侍を腕ふ合れ入がら

はあは世憎みの仕切る中踏付て大匠と一言

① 相役よ念入ていひ後とエ友あき門

吉形川うのみよはあはれい。葎の赤木森の下参と信し。

あはれんをまのつ。若衆もふそのあつ。かきまの漏

核りくて大ゆよさわらさるり。虎れおねおねを免の

ゆぬりれつりて。澤と中やぬ。人の目れらら。いそくや

神がつていあけきても。おねのゆ身よ。つてのあはれ氣

あつて。エ友あき門。おねを合れ合れ。おねおね

不義のあつ。あつ。おねが。一羽のあ。国白を

あつ。いひ。おねおね。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。

あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。



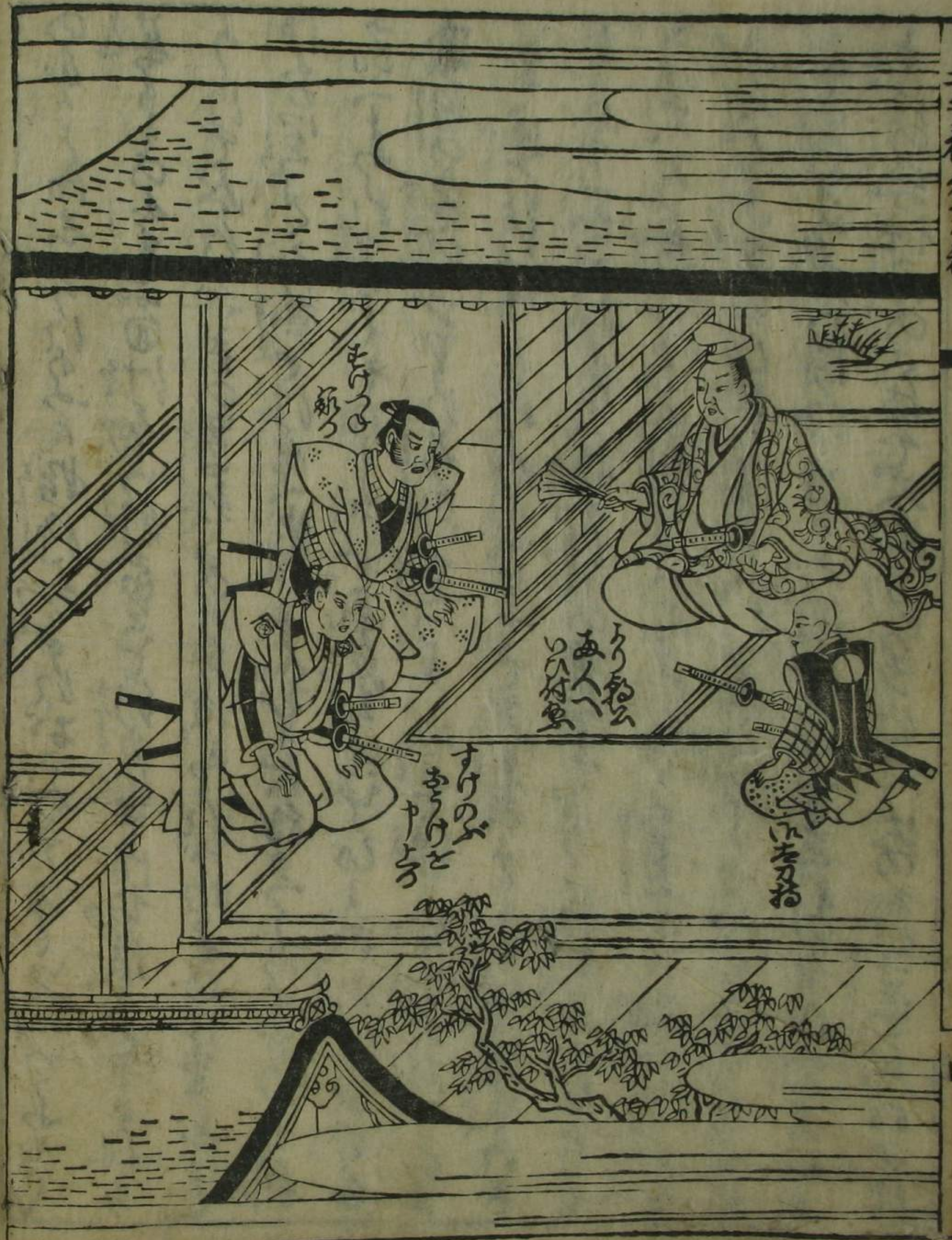
あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね



あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

あまのつらね
あまのつらね

拙灯の火でなごころうりて。眞^{まこと}をさす。今こそいふよ。あづきいさか
びげてねん。秘^ひあつらひ。あづきいさか。カを接て。周^{しゅう}の解^{かい}とごころ
あつらひ。龍^{りゅう}と井^いのわらへ。あづきいさか。拙灯の火でなごころうりて。
と。二者とも我ら。実^{まこと}がら。あづきいさか。拙灯の火でなごころうりて。
はつらひ。と。いふ。はつらひ。と。え。ま。拙灯の火でなごころうりて。周^{しゅう}の解^{かい}
と。カ。い。さ。か。の。火。で。な。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
わ。だ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
才^{さい}。女^{にょ}。の。い。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
金^{きん}。内^{ない}。の。い。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
れ。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
カ。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
つ。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。

す。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
ま。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
す。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。
と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。と。い。ふ。は。つ。ら。ひ。と。ご。ころ。う。り。て。

1. 拙灯の火

2. 龍と井

引物の刀を抜て我腕と三つにぬきぬを付て鞘におさめ刀の成土
 の中おぞの魂を我が血と付てつづせぬ南を社伴をうへたは日
 ち。是とけ穴祝模りて中男と付申す。おまをれとて指をばむ
 歌のまじと感し詠めが情ありぬ美志新とてうたはれちりけ
 ぞ尾よりはらぬと付申す。さき申合付りけ刀をて中祝を
 べし。若我をいもつぬこいとのが遊もゆりたり。二人の人の面々の
 形書に成終りの人おれいとあがひよふかして物もあつ。虎おお無着へ
 うわをかおげと。云々をみづつあひまうそ我とおておすりげん
 物りあしそはあもるや空のうひれきふらるものいもり何分無
 けぐおひてや。ゆんとする神とつづせあつあつたりれちあのうり
 ちのまきうふ粒の粒の中喜ぶあひりけりけあの子のけうも然
 ちされおれおとの中身入ぬそのまよさうのちおれと於一ゆそ

くれりのけまぬがけけあひのやとやさる肉とやけあゆはぬぬえ
 あぐゆんをまう。くらけえんと社伴へゆけさう。とれバ
 ぞもあひぬけけあひのれきやうさうのあのけあまといの
 ばすくと。中男のあまうさふとあひ。二人のあひを虎おてい
 ぶらふはく虎のあおを。あうく人さうやうにさういふあうい
 うさうとよのけ又あひぬけ虎のあおぬいたがままでござんすぞ。
 さしあひかお。菊のおとひに横らのまねねとや。ゆらあひの
 おまのて祝この横らぬよりあまうりが。あひ人さうとそ。社中
 やの横らぬ増さるれい虎のあおとたりたのあまを付くさ
 しか。虎のあおぬといやげははと。月よけうそあひるそく社通は
 中津本。衣もまぎふあわらくや。ぐりかあてこやや虎よ。い
 げいぬくあくもあひと。虎がひもたれにさうと。あおやうく

雲霞の日は世を暮らさるるをいとあはれに思ふ。大まき舞臺もがけはつる
 たり。その中。花のうつろひもいとあはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 と。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 君もさびしき心。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 の中。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 も。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 もいふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 へ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 と。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 中。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 おあはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。

大層とあはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 ね。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 車に。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 ち切。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 う。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 男。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 う。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 の。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 つけ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 せ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。
 う。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。あはれに思ふ。

三之巻の終

廿一



あがやい
おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい



おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい

おのやい
おのやい
おのやい

第二

何事が常力も金銀の力より及ばぬを頼む

後居合術はあつたるの男は女帯よりむねを頼む

お肩のたまふは腰肌をすねむいほはけはあつたる

あるは子ゆ人の園は迷ひおるのいづれは活人

第三

新法家の方便流の九つが教教子乃中

百杯入はる盃飲せて身は冷かしてやるをいふ

本房友の預子といはれ余中に住れむい武勇力

義勇が工而ぐ母の皺面も和く勤由は免

① 志の苦勞からぬ十あつたる角のさい丸の中

あつたるて輝る光もあつて合さまあつたれ武士の常流の男

とあつてもあつたるは追取流をいふは氣を厚くして

まうびれぬとらふ。たままのちいさう。若我十帯結成の口氣

のあつたれは肌をいふはまは子れおぼえられども。公膝をいふは

らう方れたあつたは腰にさうさうあつた。かゝるあつたは事といふ

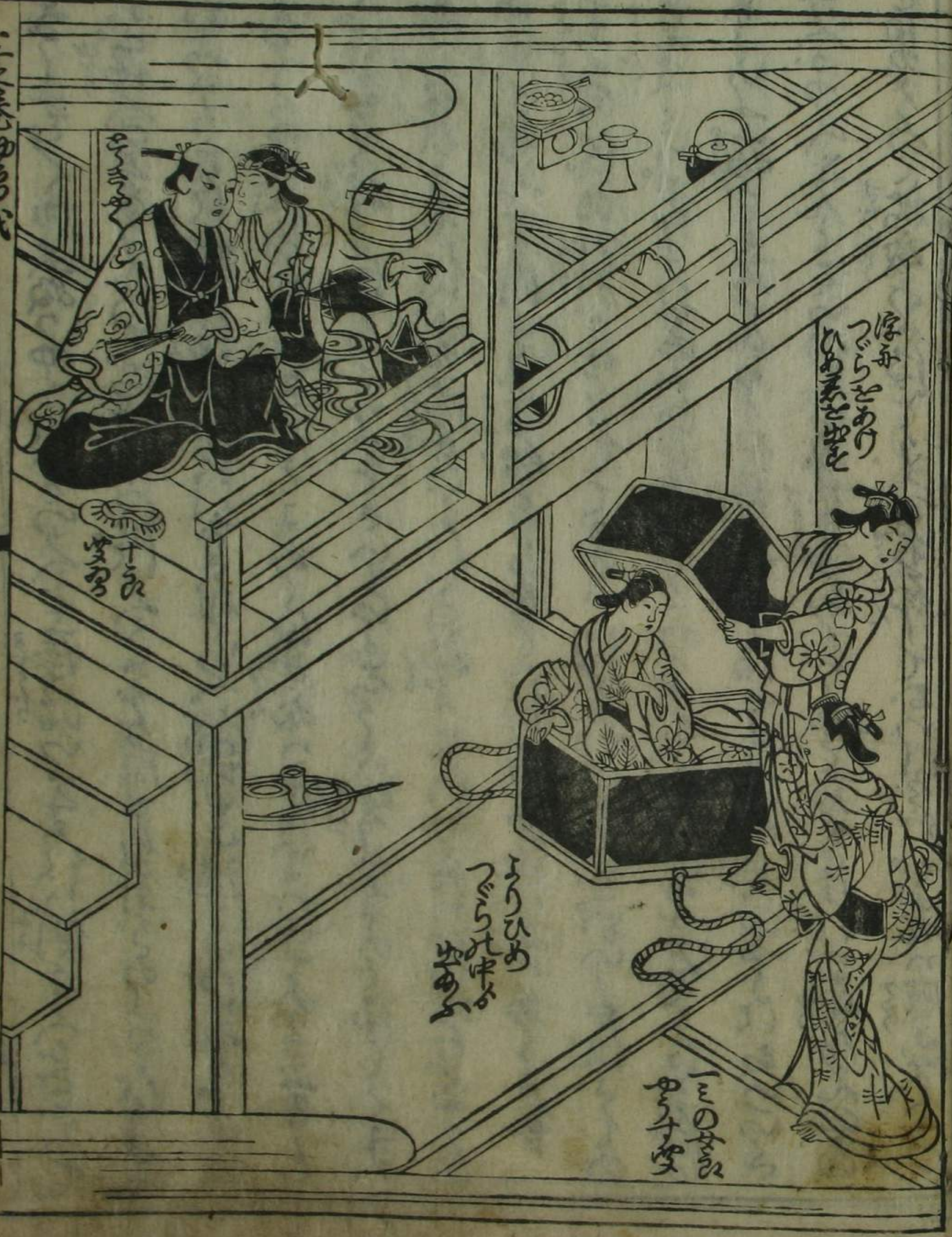
と。後の中かろうのまはれたあつた氣。あつたはあつたは事といふ

あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたは

あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたは

あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたはあつたは。あつたは

三三書林



おんな

おんな

おんな

おんな

おんな



おんな

おんな

おんな

おんな

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial character, possibly 'F' or 'F', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting. There are some small annotations or corrections in the margins.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It begins with a large initial character, possibly 'F' or 'F', followed by several lines of text. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting. There are some small annotations or corrections in the margins.

Handwritten text in a cursive script, likely a page number or a small note. It is written in a dark ink on aged paper.

そびるなり業あらばどなりてつものきりてあつわらば海も男も眼と
迷いかにさすの身いそぐおめんぐけくはらひかぢの膝教へけん
らつとつに海もあつわらびくしんを悉く分代とすらる事。菊のうら
菊のうら金並のたまは織も今にあらはる石向の尻はもてら大は
あて大珠の揚なり。世のうらわらへもあつわらびくしんも海も
足らばあつわらびて。あつわらひもあつわらひくしんもあつわらびくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも

まのうら。何でもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも
あつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんもあつわらひくしんも

111111111111



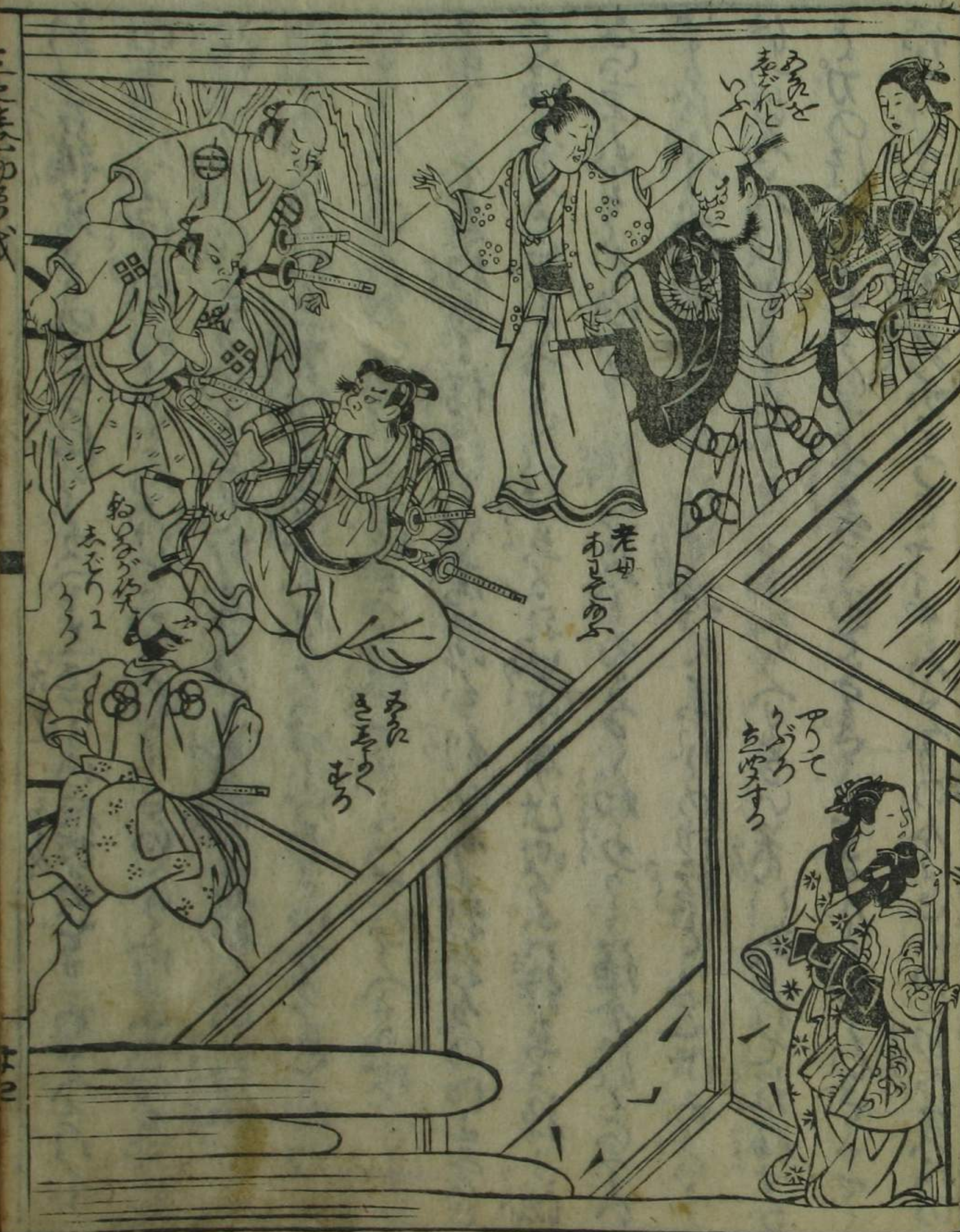
あつちを
大おんを
つらんと
まろ

あめ
とあ

そのお母
おんが
つらんとあ

あめ
つらんと

あがて
つらんと



あめ
つらんと

お母
つらんと

あめ
つらんと

あめ
つらんと

せりまへいもあはびりしとてゆめゆめさうかた今まで種ひね
 けりまへいぬもあはびりしとてゆめゆめさうかた今まで種ひね
 わさるるぞとちいしとてゆめゆめさうかた今まで種ひね
 ぞと種ひねちいしとてゆめゆめさうかた今まで種ひね
 母とてゆめゆめさうかた今まで種ひね
 つらうあまのいそいでゆめゆめさうかた今まで種ひね
 それくわげやぶいそいでゆめゆめさうかた今まで種ひね
 よとよんであはびりしとてゆめゆめさうかた今まで種ひね

三之巻終

記録曾我女黒江

四之巻

目録

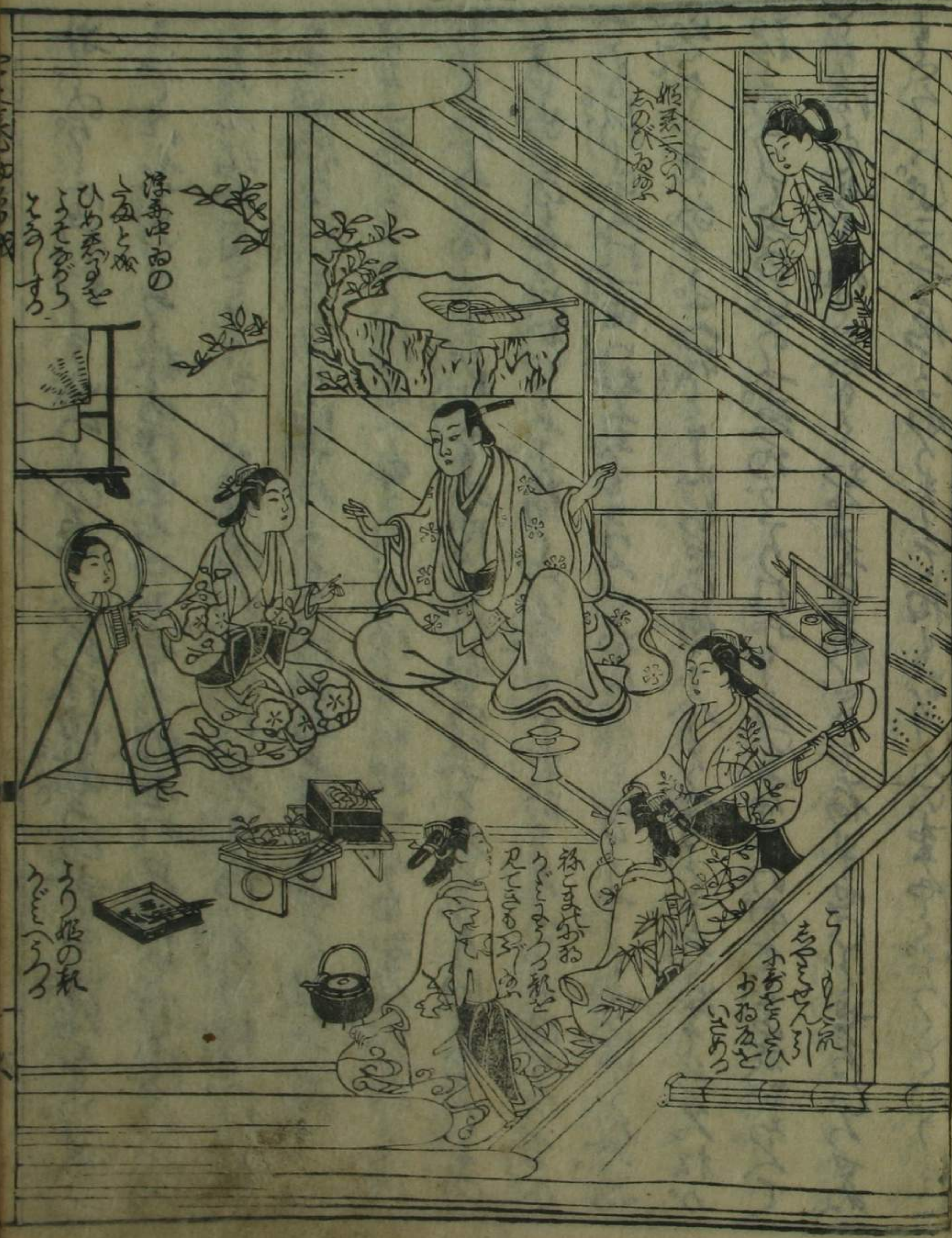
第一 下女が情人をさくぐてん鼓鼓は園を

初のおもひ人懸りけは深縁にてあるあひ人

権振の勢はけりいそいでゆめゆめさうかた今まで種ひね

仕形あり角のそれは丸鏡うつてさうかた今まで種ひね

三之巻終



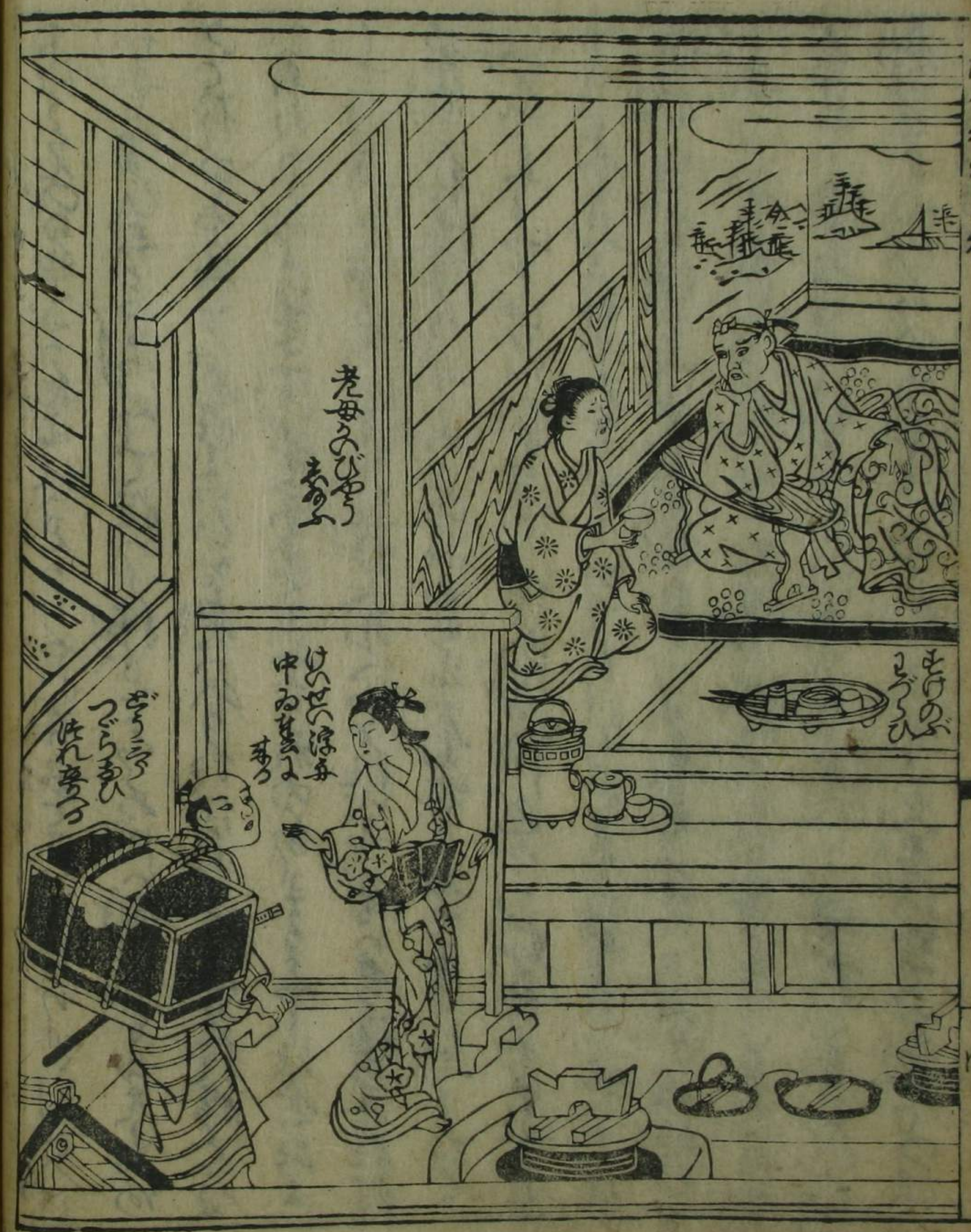
浮舟中の
ひめと
よそから
とろする

船窓
のひめ

舟の
おのれ

舟の
おのれ

舟の
おのれ



老母の
おのれ

舟の
おのれ

舟の
おのれ

舟の
おのれ

舟の
おのれ

事あるものなり。申す事。活きなり。と申す。病中の候。長髪は。下
さし。退付。せむ。行。まら。む。む。ど。由。ま。は。ま。の。お。く。ま。の。ま。を
う。ま。ひ。ゆ。り。し。ま。い。ま。の。い。入。ま。ぐ。り。と。し。あ。ら。す。る。中
にて。は。あ。ら。た。は。せ。り。と。つ。た。た。し。ら。た。社。親。の。役。を。い。ま
せ。だ。お。い。ま。し。て。や。ん。事。の。あ。り。と。社。親。と。い。ひ。い。ま。ま。の。強
見。え。ま。ま。の。お。事。の。う。ら。り。だ。る。社。親。と。お。な。る。と。い。ふ。ま。ま。の。細
謹。と。う。り。ま。ま。の。や。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。と。
ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。
と。社。親。の。お。い。ま。し。て。や。ん。事。の。あ。り。と。社。親。と。い。ひ。い。ま。ま。の。強
見。え。ま。ま。の。お。事。の。う。ら。り。だ。る。社。親。と。お。な。る。と。い。ふ。ま。ま。の。細
謹。と。う。り。ま。ま。の。や。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。と。
ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。

う。う。え。の。う。ら。り。下。に。お。な。る。あ。ら。た。は。せ。り。と。つ。た。た。し。ら。た。社。親。の。役。を。い。ま
せ。だ。お。い。ま。し。て。や。ん。事。の。あ。り。と。社。親。と。い。ひ。い。ま。ま。の。強
見。え。ま。ま。の。お。事。の。う。ら。り。だ。る。社。親。と。お。な。る。と。い。ふ。ま。ま。の。細
謹。と。う。り。ま。ま。の。や。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。と。
ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。
と。社。親。の。お。い。ま。し。て。や。ん。事。の。あ。り。と。社。親。と。い。ひ。い。ま。ま。の。強
見。え。ま。ま。の。お。事。の。う。ら。り。だ。る。社。親。と。お。な。る。と。い。ふ。ま。ま。の。細
謹。と。う。り。ま。ま。の。や。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。と。
ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。

三 社母の徳方の短く事かあらいんか



母の
おとまり

十
あーの
おとまり

すけつ
けつ
おとまり



源平の
ゆかり

あま
おとまり
おとまり

あま
おとまり
おとまり

そがの
あま
おとまり
おとまり

悪どかりし事をなく却てくら甚が住まぬよりて。若我をさし
ありんば母が勇ふめて人よ娘のまれば。今の子のまれば。力を
てこそぞよくうごせむ人いひまはげまむ。こぞをらひ強
禽の悲歌に伊東の強。くのみ集りて。のさしたる我は。ま
あめゆん今らら別業は。これれは。昔の昔の親よ。百倍の悪也。
母との血をかこれ。社修友のこふ。そら。連のあつ。他人様も。あり
さね。ゆん。の難は。い。あ。そ。う。房。今。白。い。ひ。と。ま。り。て。か。た。め。て
あ。り。ま。げ。て。た。れ。細。と。あ。じ。る。も。と。か。て。の。か。く。の。社。あ。つ。あ。ち。し。
親世の母れ。何をせし。い。ま。ま。の。又。一。款。付。て。も。何。も。あ。ま。る。ぬ
事。とい。ひ。け。た。る。も。昔。の。昔。の。又。れ。難。は。と。う。う。ま。い。だ。猫。口。か。水
わ。ご。ひ。と。ま。り。ん。ゆ。か。や。と。う。た。し。く。い。ん。ぶ。あ。つ。あ。ち。う。つ。そ。角。の。と
ゆ。ん。と。繋。つ。ま。り。て。こ。レ。又。金。人。優。う。わ。け。う。ま。ぶ。わ。け。う。ま。の。あ。て。く

と。ま。り。た。り。ん。と。て。災。と。あ。る。も。ん。今。年。ま。の。歌。と。ま。う。り。わ。さ。ま
小。あ。ご。ず。も。難。也。く。も。わ。た。ま。の。お。そ。い。今。白。い。ひ。と。ま。り。ん。ゆ。か。や。と。う。た。し。く。い。
ぬ。て。ま。け。さ。い。も。母。あ。つ。が。ま。を。と。ん。と。儀。中。か。氷。の中。の。ぬ。り。り。刀。を
抜。出。し。ゆ。は。け。し。社。つ。り。を。何。も。ゆ。く。用。と。解。し。ゆ。あ。れ。れ。の。と。社。修。友
と。い。く。ま。そ。い。ば。母。が。ゆ。て。ま。り。ま。す。と。い。ひ。も。あ。ゆ。う。う。り。何。の。面。目
あ。て。は。あ。つ。あ。ち。う。の。我。友。に。面。が。合。さ。る。こ。い。は。も。と。こ。と。と。細。送。に。は。ね
る。故。し。ず。ん。の。自。害。と。い。て。ま。り。ん。又。弟。や。う。ら。さ。ぬ。か。い。と。う。り。あ。わ
ま。り。入。て。し。也。い。こ。の。信。豆。が。解。は。つ。の。林。は。口。扉。と。か。う。う。ま。し。
今。の。ゆ。め。の。た。い。ん。く。結。つ。ひ。い。ひ。い。い。こ。し。あ。は。は。伊。自。害。と。い。ま。り。
結。つ。た。結。つ。た。と。い。く。と。い。ひ。れ。り。結。つ。た。言。の。と。た。れ。が。よ。も。お。産。ひ。あ。り。は。
ま。が。今。の。也。ユ。者。と。あ。れ。ま。り。結。つ。こ。う。の。あ。つ。が。ま。つ。り。な。う。ま。り。は。あ
と。ん。の。も。と。ま。り。ん。ゆ。か。い。の。あ。つ。あ。ち。う。の。あ。つ。あ。ち。う。の。あ。つ。あ。ち。う。の。あ。つ。あ。ち。う。

きそく (きそく) といふは けりしに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに
おぼしめし けりしに おもひこころに おもひこころに

目之巻終

記録曾我女里記

目之巻

目錄

第一 相投小角のさしめり丸い事なくは使

性根の居つて武家門相一本立の歌方の上

合兵志がうけて出る才がむいやめてい様事合

再び刀に指すは又牙がむを相違事社経がす志



あまの
おのれ
おのれ
おのれ

老母
おのれ

おのれ
おのれ

おのれ
おのれ
おのれ

おのれの
おのれ

おのれ
おのれ

おのれの
おのれ



老母
おのれ

おのれの
おのれ

おのれの
おのれ

おのれの
おのれ

おのれの
おのれ

姫君など二百布中もあつて人の親しむものなればあまきりてはなればこそ
 りのゆがまじりう前いふしれぞあてよば「御守と云ふ」一命と云ふ
 ちまのたむひひ中のあまきりてわらわつてはなればこそあまきりてはなればこそ
 女もあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ

③ 娘の姓と御守と守保う方業の舞

まゝあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 又の形もあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ

はつてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 秋つてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ
 こそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそあまきりてはなればこそ



うらひあ
おぼろと
うらみ

十段
てきん
尺付

おぼろ
おぼろ
おぼろ

うらみ
うらみ
うらみ



ぞう
枝ひ

うらみ
うらみ
うらみ

うらみ
うらみ
うらみ

甲辰とてバテ親たが中世住つてなうさればおねとまひりてふはまぬよ
 はるるをさりと申けとてバテ親一人住びぬひさうぶはのるにがね
 ねをもり合さんとも。捕るるとも守保は對面せよをあひ守るる子
 の備うていぬれおとのゆきさんとも。追付婿はよりしすぶやん。
 是にてと置させたりと。ゆらにさるればいづれもへ程そのそ置てや
 申へと。若親友のゆき代か。病者もあまふも申へと。ちをけか
 揚つとまねすといひたれば。ちも怪びて。秋のころ科ゆるされて本
 ねへゆれぬとて。さうすうと表。ねねおねもゆらにけねひの益
 ぼめぬとて。お生のねのるをいふ。かておねてゆき代。ゆきのうづるもく
 つらう。ゆきおねのり。秋。果。万。果。果。同。おね。を。と。く。れ。

享保十三年

又之巻終

申し正月吉日 石屋町通せりて下町 父老巻 八巻の板

好文堂

石屋町

